

東南アジアをめぐる中ソ抗争

現地に見たその熾烈な状況

増えた反ソ書物

インドシナ戦後の東南アジアはいま、新たな国際秩序の形成に向けて、激しい流動と再編の過程にある。そうしたなかで、全欧安保会議の「成功」によって西を固めたソ連のアジア進出が改めて注目されているのだが、このようなソ連の戦略自体が中国の激しい反発をさそっていることについては、いまさらいうまでもない。

中国は、あらゆる意味で東南アジアに潜在的な地盤をもっているのに対し、ソ連にはそれが欠如しているだけに、ソ連のアジア進出は、いきおい行動的ないしは拡張主義的にならざるを得ない。そこに「アジア集団安保」構想という理念がかぶさっているだけに、かえって複雑な波紋を呼ぶ。

私はこの九月上中旬の二週間、インドシ

ナ戦後のアジアの国際環境の形成過程を知るために、東南アジア諸国をまわってきたが、ここ数ヶ月のうちに、東南アジアをめぐる中ソ対立がますます激しくなり、状況はもはや文字どおりの中ソ抗争であり、新たな冷戦だとみなさざるを得ない場面にしばしば出会った。インドシナ半島をめぐる中ソ対立についても、われわれはいまや、かなり明白にその輪郭を描くことができる（この問題について、詳しくは拙稿「インドシナをめぐる中ソ対立」『国際問題』一九七五年十月号参照）。

さて私は、まず、中国の南の玄関口でもあり、東南アジアの入り口でもある香港に立ち寄ったが、商務印書館や三聯書店といった中国系の公認書店をのぞいてみて、いわば「ソ修社会帝国主義」の「罪状集」といった書物が多くなっていることに驚いた。

そのなかの一つ、盤古出版社編著「蘇聯問題文集」（この九月に発行）を読んでもみると、香港に対するソ連の浸透工作についても、詳細に記されている。こうしたソ連の活動に対して、イギリス香港政庁はきわめて警戒的であり、最近ではソ連船が入港しても、乗員の上陸をいっさい許さなくなっているほどである。これらは表面に目立った例だが、私にとって香港は三ヶ月ぶりだから、この三ヶ月の間にさえ、こうまで状況が変化しているのである。

チモールに中ソの影

シンガポールは、「中国の影」に対するリー・クアンユー政権の厳しい抑制がききすぎていたためか、中ソ抗争の舞台にはなり得ていない。しかし、そのシンガポールでさえ、チモール内乱、サバの分離独立への動き、ミンダナオ島、スールー諸島などフィリピン南部の回教ゲリラの反乱、パプアニューギニアの独立など、アジア、太平洋地域の「十字路」に位置する海峡都市国家・シンガポールにとっては無視できない

新しい動きの背景にまで中ソ抗争の波紋が広がりかねない今日の現実に、対処せざるを得ないのである。

たとえば、南太平洋の一隅のポルトガル植民地・チモールで現在起こっている紛争にまで、中ソ対立の影が色濃く及んでいるという見方もあることについては、まだあまり知られていないのではなからうか。つまり即時独立を要求する急進派の東チモール独立革命戦線(FRETELIN)は、親中国の毛沢東主義者が中核であるのに対し、漸進的独立を唱えるチモール民主連合(UDT)は、親ソ的なポルトガル共産党の影響下にあつて、ここにも中ソ対立が及んでいるという見方である。

この見方は、現時点ではやややうがちすぎであるかもしれないが、情勢の展開次第では、この内乱が中ソ抗争のの代理戦になる可能性を否定することはできないであろう。

マレーシアのラザク政権にとって頭の痛い問題は、首都クアラルンプールにまで影を落とした共産ゲリラの問題である。いわゆるマレー化政策で抑えつけられているうちに、中国人を主体とするマラヤ共産党の

活動の激化によって再び人種暴動の根が掘り起こされかねないことを恐れるマレーシア人は、これでは対中国交正常化の効果がないではないかといぶかっている。

たしかにゲリラ活動は最近ますます激化しており、ペラ州のイポー周辺やタイ国境に近いケダ州では、ちょうど私がそこに滞在中、連日、新たな地区に戒厳令が発せられていた。さらに、従来は中国の影響下にあつたマラヤ共産党が最近ではむしろハノイの影響を受けつつあるのではないかという問題があり、そうなるこの点からもソ連の影が及んでくるかもしれない。私の滞在中、バタウィース港(ペナン対岸)にまでソ連の大型貨物船が停泊していたが、中国はこうしたソ連船の入港を単なる通商目的のものとはみなしていない。

中ソ抗争の舞台

私は今回、シンガポールからバンコクまで汽車で国境を越えて北上したが、タイ南部にもソ連の工作が及んでいる。対中国交正常化以来、一種の中国ブームに沸いたタイでのソ連の工作は、それだけにきわめて活発であり、この点については、去る七月

二十二日の「タイ人民の声」放送が、タイにおけるソ連の「スパイ・転覆・破壊活動、内政干渉、ぎまん宣伝」などを詳細に報じて激しく非難していたけれども(「人民日報」七月二十五日)、ある意味で、この非難が当たっていると思われるほど、ソ連の活動が目立っている。

今夏も、十月政変のリーダーだった学生運動や労働運動の指導者がソ連に招かれたり、バンコクのみならずチェンマイにもソ連は「拠点」をつくろうとしているなど、ソ連の浸透工作の積極さが目立っており、こうしてタイは、まさに中ソ抗争の舞台になりつつある観がある。

いずれにせよ、中ソ対立はいまや、東南アジア、南洋社会の牧歌的な風土を侵して激しくぶつかりあい、ASEAN(東南アジア諸国連合)諸国を外から揺さぶりはじめている。このような現実のなかで「前門の狼を拒み、後門の虎を防ごう」とする中国の強い立場も明白であり、こうして東南アジアをめぐる中ソ冷戦は、さらに激しく角逐してゆくであろう。

《東京外語大助教授 中嶋嶺雄》

世界週報

10月14日号 1975

大正9年10月9日 第3種郵便物認可
昭和29年2月19日国鉄東局特別扱承認雑誌
第2736号 第56巻 第41号 通巻第2710号
昭和50年10月14日発行(毎週火曜日発行)

時事通信社

[世界の焦点] 東南アジアをめぐる中ソ抗争 中嶋嶺雄

東南アジア共産党の
実態を解明する (4)

フィリピンにおける共産主義運動の現状

浅野幸穂

中国—その経済的再評価 中華人民共和国の工業生産 R・M・フィールド

蔣経国台湾行政院長



石野の将来はじつなる

国政人

エール大学教授

文化と

趙浩生

四島司

福岡新聞社蔵行社